



## かげろうになった母

---

食糧不足が人類の問題になってから数百年。

人口は減り、文明は廃れ、人類は滅びつつあった。

母がかげろうになったのはそんな最中だった。

ある日消えた母の行方を父に尋ねると

母さんはかげろうになった。

とだけ伝えられた。

かげろう。

陽炎。

春の天気の良い穏やかな日に、地面から炎のような揺らめきが立ちのぼる現象。強い日射で地面が熱せられて不規則な上昇気流を生じ、密度の異なる空気が入りまじるため、通過する光が不規則に屈折して起こる現象。

蜃気楼のようなものらしい。

その時の私には、幻のように消えていく様子が想像できた。

透明感のある母には似つかわしい消え方にも思える。

それから数年後。

私も大人になった。知識も増えた。

かげろうには他の漢字もあることを知ったのだ。

蜻蛉。

虫の種類でかげろうという名前の虫がいるらしい。

生まれて2, 3日で死ぬ。

口は退化して食物を取れない。

胃の腑には空気ばかりが入っている代わりに、卵だけは腹の中までぎっしり詰まっている。

大量の子供を生むためだけの生き物だそうだ。

今も人類は食糧問題に悩んでいるらしい。

## 宇宙人襲来

---

宇宙人がやってきた。彼らは優れた文明と知能を持ち、文字通り侵略者として地球へと降りた  
った。

彼らにとって地球を滅ぼすことは造作もないことだった。

問題はいかに労力を減らして殺すかだ。

「この星を支配している種族を滅ぼすのが手っ取り早い。そのためにはその種族になりすまして  
同類を殺していくのがバレにくい。」

数々の惑星を滅ぼした経験から宇宙人はこのような結論に達した。

「この星を支配しているのはあの種族でしょう。力や体は他の生物に比べて大きくはないが、随  
分と恐れられているようだ。」

「よし、そうしよう。一気にかたをつけるぞ。全員でいっせいに変身してあちこちからこの星の  
生き物を一網打尽だ。」

彼らは自分の姿を変え、地球の地に降りたった。

ぺち

大都会のど真ん中。誰かの足がゴキブリを踏んづけた。

## 変な生き物

---

今日は相談があってここに来ました。私は今、一人暮らしなのですがさっき、変なことが起きたんです。

ちなみに靈感とかそういった類のものは全くありません。

だから、その、もしかしたら私の幻覚なのかと思ひましてここにいるんですけど。

いえ、特に私生活に問題があるようなことはありませんし、仕事もしていますが嫌で嫌でしょうがないなんてことも無いんです。

去年に離婚をしたんですけど、元夫とのいざこざもありません。

だから精神的に疲れているとは思えないんですけどね。

もしかしたら、無意識に疲労を感じてるなんてことはあるのかも。

あ、はい。その幻覚の内容なんですけど。

そのなんて言うんでしょうか。

家に変な生き物がいるんです。大きさは、そうですね中型の犬くらい。形は円柱を横に倒したような、まるで芋虫みたいな形です。

とにかく気持ち悪くて。だって巨大な芋虫がもそもそと動いているんですよ。

鳥肌が立ちました。

ええ。すぐ警察を呼びました。こういう時って警察で合ってるんですかね？とにかく警察の方が来てくれたんです。

私は必死に説明したんですけど、全く取り合ってくれなくて。例の生き物を指して、あれを何とかして下さい。って伝えたんですけど、苦笑いするだけなんです。一体何を言っているんだ？って感じで。

初めに私が、自分は幻覚を見ていると言ったのはこういうわけです。

私にはその変な生き物が見えているんですが、警察の方には見えていなかったんです。

情けない話なんですけど、最初は幻覚なんて思えなかったのでかなり取り乱してしまいました。

何故見えないんですか？あの化け物が？って泣きわめいていました。

警察の方は本当に親身になって聞いてくれました。

大丈夫？病気になる。一緒に行くから。と背中をさすってくれました。

それで今ここにいますけど。

その警察の方ですか？

多分、外で待っているはずですけど。

息子？いえ。私には子供はいません。 」

## 【診断結果】

『患者に関する幾つかの調査結果。』

患者が病院を訪れたのは数年前。

自分の子供を見て、部屋に変な生き物があるとパニックになったためにこの病院に連れて来られた。

周りの証言では、前日までの時点では生後二ヶ月の赤ん坊を自分の息子として扱っており、近くのスーパーでも一緒にいるのが目撃されている。

また、次の日になると前述したような症状は収まり、今までと同じように息子を認識した。

それからある一定の周期を持ってこの症状は発病し、その度にこの病院を訪れている。

またその際には前回の記憶はなく本人にとっては、いきなり部屋に見たことのない変な生き物が現れた。となっいる。

また、さらに特記することとして、この状況下では患者は離婚したことになっている。

直近の例では患者は警察に電話したことになっているが、実際には警察は呼んでいない。近くにいた夫を警察に見たてて話を始めていた。

また、その後ここに連れられてきた患者に対し、夫に医師の代わりにさせると、患者は彼を夫で

も警察でもなく医者として話を始めた。』

「ふう」

私は、自宅の書斎で調査結果に一通り目を通した。

精神科医は他人が書いた客観的な記述を読むのも時には重要だ。  
特に今回は事故的だが私も関わっている。

私は部屋を出ると冷蔵庫を開ける。

「ビール？ごめんね。今切らしてるの。」

妻が言う。

「そうか。」

私は部屋に戻る。しかし、口の渴きを覚えた。お茶でも良いから飲みたくなる。

再び台所へ行くと妻が泣いていた。どうかしたのか？と私がよりそう。

妻は怯えたような声で私に言った。

「助けて下さい。変な生き物がいるんです。」

またか。。。。

私は頭を抱える。

「いや、おっちゃんもな。無理言ってるつもりはないねん。君かて事情っつーもんがあるわけやろうし。四六時中こっちのことを考えろっていうのは流石に無茶だと思う。でもな？分かるやろ？」

「・・・・・・・・はあ。」

私は気の抜けた返事をする。そして自分のベッドの上を見た。そこには足を組んで座っているクマのぬいぐるみがいる。

私は彼に言われるがまま、そのベッドの前で正座をしているのだった。

「こっちも仕事でこういうことしてんねんからな。それなりの義務っつーもんがあるわけや。」

「義務・・・・ですか？」

私は尋ねる。このぬいぐるみは私が小さいころ誕生日に買ってもらったものだ。赤ちゃんと同じくらいの大きさのそれは、当時はとても巨大に感じたが、今見てみると小さい。

「君を楽しませるっていう義務にきまっとるやろ。そういう使命でおっちゃんたちぬいぐるみは子供たちのもとに運ばれてんねん。当たり前やないか。」

「いや、決まってるって…。てか私、お客さん待たしてるんだけど。」

当たり前やないかといわれても困る。そもそもクマのぬいぐるみが関西弁でしゃべりだすということ自体、私の中では全然当たり前のことではない。

途端、ぬいぐるみはうわっと言い、手を口にあてて大きくのけぞった。

「口ごたえしよった。おっちゃんに口ごたえしよったで。悲しいわ～。昔はもっと素直ないい子やったのに。」

ワンワン泣き出すぬいぐるみを目の前にし、クマがワンワンて。と、どうでも良いツッコミを心の中で思い浮かべる。

同時に私は数分前の出来事を思い出した。

その時私はクローゼットの中を開いて、いるものといらないものの整理をしていた。

使わないものはほとんどこの中に詰め込んでいたので、いままで探していたものから遥か昔に使わなくなって捨てたのばかり思っていたはずのものまでありとあらゆるものが出てきた。

その中に入っていたのが、このぬいぐるみだった。

ほこりまみれのそのぬいぐるみは、私がそれを持ち上げたと同時に口を開いた。

「いやー、かなわんわ～」

驚いた私は思わずぬいぐるみから手を離してしまい、重力に従いそれは地面へと落下した。

いたっとぬいぐるみは声をあげると、ひとりでにむくっと起き上がり、体中のほこりを自分で払うと、私のベッドによじ登った。

「ちょっとそこに正座しようか？」

呆然とする私に向かってクマのぬいぐるみは説教を始めた。

そして現在に至る。

「おっちゃんかてな。分かっとなねん。」

いつの間にか泣き止んでいるぬいぐるみは遠くを見ながら話し始めた。

「君はもうおっちゃんみたいなぬいぐるみを必要とする歳やない。そんなことは分かってるんや。」

それにな、と私の方を見る。

「おっちゃんも見ての通り40歳過ぎやろ？」

私に同意を求めるように両手を広げ首をすくめた。

「・・・見ての通りと言われても」

全然分からない。

するとぬいぐるみは微笑んだ。

「優しいな。まだまだ若いといってくれるんか。」

「いや、そういうわけじゃ」

「もちろん。おっちゃんかて若いもんには負けるつもりもない。まだまだ現役で働くつもりや。再就職なんてまっぴらゴメンだしな。」

再就職？どこに？

「でもやっぱりな。」

ぬいぐるみはかまわず話し続ける。

「君にはもうおっちゃんが必要ないやろ？そうすると頑張りたくても頑張れないわけや。なら再就職もやむをえないとも考えてまうんや。」

「あの？・・再就職って？」

私は口を挟んだ。

「ああ。やっぱりおっちゃん的には今のクマの経験を生かして、ウサギとかにしようかなとか思ってたねん。どっちも哺乳類系統やし、仕事の勝手も分かってる。面接にも有利や。」

また一人でべらべらと話し始める。

質問に答えてないし。面接？何の？

当然の疑問が湧き出る中で、私はこのぬいぐるみの声にどこか、から元気というか無理して明るく振舞っているように感じた。

なぜだろう？

「だから、全然かまわんで。正直、久しぶりに元気そうな君の顔が見れておっちゃん満足してんねん。いや・・・ほんとにな・・・」

ぬいぐるみの声は少しずつ震えだした。

「こんなに・・・おっきくなってな・・・りっぱなもんや。」

そこから先は涙で言葉になってなかった。

ようやく分かった。なぜ私がこの違和感の塊といえる状況を案外すんなり受け入れているのか。

間違いなく私は、小さい頃このぬいぐるみと一緒に過ごし、会話し、語ったのだ。

いつも側にいて、私を見守ってくれていたのだった。

「おっちゃんはまだ戻るわ。君はもう一人で生きていけるみたいだしな。」

ゆっくりとぬいぐるみは立ち上がった。

私は自分の部屋から出ると、居間に戻った。

そこにはお姉ちゃん夫妻が遊びに来ていて、お姉ちゃんの膝の上には3歳になる娘がいる。

私にとっては姪だ。

「うわ～。可愛い。」

姪がうれしそうに私があげたものを見て目を輝かせる。

「あら、男の子かしら。女の子かしら？」

お姉ちゃんが娘に問いかける。

「絶対女の子だよー。」

姪は嬉しそうに言った。

「40過ぎのおっちゃんらしいよ。」

私は真実を伝える。

「えー。そんなのやだー」

姪はぷくっと口をふくらませた。そう言いながらぬいぐるみを抱きしめた。

## ”文字化け”

---

それは私の世界で突然起こった。

はじめは大学に歩いて向かう道中の看板。いつもなら何のなしでしか見ないそれが、その日は私に異様なものとして映った。

【あ s ふ b だ s b s】

見慣れない文字がそこには書いてあった。頭をひねり、目をこすってみるがそれは消えない。

最初はそれだけだった。他の看板はいつもどおりの文字が書かれ読むのに支障は無い。

その看板の文字だけが読むことのできない不可解なものになっていた。

それからある一定の頻度でこの文字が私の生活の中で見られるようになった。

教科書の一文であったり、テレビのテロップだったり。

いつもは慣れ親しんでいた文章が、全く意味不明の文章になる。

そして、困ったことに時間が経つにつれてその頻度はだんだんと短くなっていった。

当初は月1度くらいだったのが、週に1回。数日に1回。

今では毎日のようにこの現象が起きてしまうようになった。

加えて、その範囲の広さも拡大している。

もともとは視界の中のほんの一部だけがそうだったのに対し、今では2～30パーセントがわけの分からない文字で埋められているのだ。

さらに文字だけでなく、人の話す言葉にも影響が出てきた。

いよいよわけが分からなくなり、私は母親に全てを打ち明けて精神科を訪れた。

母子家庭で私を育ててくれた自慢の母だ。

医者もはじめてみる症例だと唸り、便宜上”心理的文字化け”とそれを呼んだ。

脳の一部が外部の言葉を上手く変換できずにいるのだらうと説明した。

もちろん、彼の言葉の何割かは私にとっては意味の分からない言葉だ。  
そんなときは身振り手振りでなんとか伝えてくれた。

現状では有効な手段は分からない。

ただ、心理的なものである以上、ある日突然治る可能性もあるし、このまま悪化する場合もある。

医者はそう言った。

この症状はそれからもひどくなり、私はまともな生活が出来なくなった。

そんな私を母は一生懸命に支えてくれた。常に優しく私を励ましてくれた。

残念ながら私はその言葉の半分しか分からなくなっていった。

でも残りの半分から内容は推測出来たし、その温かな表情からもぬくもりを感じていた。

数年後、私は身の回りの言葉がほとんど分からなくなる。

母も治る見込みの無い私の病気に疲れているようだった。

でも、私の前ではそんなそぶりは見せず、いつも通り優しく接してくれる。

そんな母に私はとても感謝している。





## 食虫毒

<http://p.booklog.jp/book/77916>

著者：水谷健吾

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/syakkuk/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/77916>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/77916>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ